

「比較的大きいホール」——公演の「場」から捉えなおす日本のモダンダンス史

北原 まり子
早稲田大学スポーツ科学学術院

非職業的な自己資金公演とプロ的な「比較的大きいホール」を結びつける日本のモダンダンス

半世紀の間日本の舞踊界を見守ってきた舞踊批評家で経営学者のうらわまこと氏は、2003年にインターネットサイト上で、「独断、偏見」と断りつつ、日本のモダンダンスの特徴を、「スタジオ、スクールをもち、その生徒とゲストによって、年1～2回新作を発表する。公演日は比較的大きいホールで1日。営業や制作担当をとくにおかず、チケットも主宰者や生徒（弟子）の関係で売りさばく。とくにレパートリーを準備してはいない。舞踊団体による合同公演もしばしば行われ、そこを発表の場とするダンサーも多い」と要約した（Dancing×Dancing: <https://kk-video.co.jp/old/column/makuai-lounge/urawamakoto/vol/003.shtml>）。それは、「中小の会場で複数日公演を行う。ホールやプロデュース会社主催の会もあり、海外との交流も活発である」（同上）という特徴をもつ日本のコンテンポラリーダンスとの対比であった。

本研究では、うらわ氏の指摘した「比較的大きいホール」という点に着目する。この表現が意味するところは、具体的な席数による大小の定義というより、地域の文化会館のように額縁もしくは正面性の様式で一定の劇場設備を持った舞台を指し、オルタナティブスペースを積極的に活用する1970年代以降の前衛舞踊やコンテンポラリーダンスの流れとここでは区別されていると考える。戦前で見れば、1935年度の『舞踊年鑑』に掲載された「舞踊会ホール一覧」にある、1000～2000席台の日比谷公会堂や日本青年館講堂等の所謂「新式公会堂」を頂点に、600～800席程度の蚕糸会館や仁寿講堂等のホールがあげられよう（舞踊専門の「劇場」設立も1930年代から切望されていた）。

欧米のモダンダンスの歴史においては、経済的事情や文化的事情（劇場舞踊であるバレエとの美学的・社会的対立等）から、スタジオやオルタナティブスペースも発表の場として用いられてきたが、日本の洋舞界では比較的高額な貸し会場を借りて新作を発表するという伝統が長く維持されてきた。

本研究では、非職業的な自己資金の経済と非素人的な創作発表の場が結びつく、独特な日本のモダンダンス界の歴史的成り立ちとその要因について、分析する。

石井漠、高田雅夫・原せい子夫妻における欧州の「芸術舞踊」の影響と、「春秋2回の新作発表会」の伝統のなりたち

石井漠は、帝国劇場の職業舞踊家としてそのキャリアを開始したが、1910年代の欧州から帰国した小山内薫、山田耕筰、大田黒元雄を通じて、西欧における会員制的な小演劇運動や、モダンダンスの沙龙的な起源も間接的に経験した。1917年以降商業的な浅草オペラを経て、1922年に有楽座で、日本舞踊の新舞踊運動からインスピレーションを得て、自身の舞踊作品のみからなる初のリサイタル形式の「発表会」を開いた。

石井と高田が洋行中、特にドイツで強く認識したのは「娯楽舞踊」と明確に区別される「芸術舞踊」であり、帰国後にそれぞれ「舞踊研究所」を設立し、やがて今日でも多く見られる「カンパニー＝学校＝自宅」の体制が整っていく。石井漠は最初の数年、ドイツ表現主義に倣った少人数の簡素な舞台を打ち出していたが、試演を想定して照明装置を備えた自身の稽古場で上演を行った形跡はない。1929年、高田雅夫の死去（5月）や石井小浪の独立（8月）によって研究所体制がより強められ、10月に開場した日比谷公会堂が石井・高田の「本公演」の場となった。こうして、自身の創作力を世に問う「春秋二回の新作発表会」とそのための資金を得る「地方巡業その他依頼公演」からなる舞踊家の活動のサイクルが形成された。

同時代の眼：蘆原英了、江口博、石井漠等

日本の文脈で形づくられていったこのモダンダンスの体制について、蘆原英了は1930年代半ばのパリ滞在の経験から日仏を比較し、小劇場の公演を勧めている（『音楽世界』1935年6月・8月）。また、江口博と石井漠は、サカロフ夫妻の2度の来日を比較して、日本の舞踊家が常に大量の新作を作らなくてはならない現状を批判している（石井漠「新進舞踊家を語る」1934年10月；『音楽世界』1934年11日）。

本研究から、日本のモダンダンスが伝統的に「比較的大きいホール」を本公演の場としてきたことについて、以下の歴史的要因を指摘できる。

- ①日本のモダンダンスのパイオニア（石井・高田）が職業家としてキャリアを開始したこと
- ②日本のモダンダンスにおいて「創作すること」が非常に重視されていること（新作発表会）
- ③その形成期（1920年代後半）に貸し会場としての新式公会堂やホールが著しく増加したこと
- ④研究所及び研究生／生徒をその創作活動の核としたこと